

Saul Bellow とニューヨーク

大工原 ちなみ

富山大学人文学部紀要第74号抜刷

2021年2月

Saul Bellow とニューヨーク

大工原 ちなみ

ロシアからの移民を父に持つ Saul Bellow は、カナダのモントリオールの貧民街で幼少期を過ごしたが、人生の大半をシカゴで過ごしている。彼が作家としての黎明期を過ごし、2 番目の小説である *The Victim* の舞台でもあるニューヨークに焦点を当てて、Bellow 自身の発言や周囲の人々の記録から、彼にとってニューヨークとはどのような場所であったのか考えてみたい。

1. シカゴから *The Victim* の舞台であるニューヨークへ

Zachary によれば、Bellow は 1930 年後半からニューヨーク行を繰り返している。シカゴ出身者にとってニューヨークがどのような場所であったのか、彼は下記のように語っている。

To an ambitious writer from Chicago, New York was as good a place as any. Not only did it draw artists and intellectuals from all over the United States, but from the mid-1930s onward it sheltered an unprecedented influx of European artists and intellectuals, including prominent contributors to *PR*. For Bellow, *PR* itself was a virtual Paris: Rahv and Phillips "thrilled us by importing the finest European writers and familiarizing the American literary public with them. where else would you find Malraux, Silone, Koestler and company but in *Partisan Review*? Zachary (274)

彼によれば当時のニューヨークは全米から芸術家や知識人が集まる場所であり、さらに 1930 年代以降は戦火を逃れてヨーロッパからもそのような人々が多数流入していた。その中には *Partisan Review* の寄稿者となったものも多く、ニューヨークはさながらバリの様な様相を呈していたのである。当時のニューヨークでは、ユダヤ系の知識人が台頭し始めており、1934 年には、John Reed Club of New York の後援を受けて Philip Rahv, William Phillips により *Partisan Review* が創刊された。ユダヤ系のプロレタリア作家である Michael Gold やユダヤ系の雑誌である *New Masses* の編集者である Joseph Freeman からも資金援助している。同紙は 1936 年に一度中断されたが、1937 年に共産主義の影響を脱して、新しい作家や編集者を入れて再スタートしている。Bellow も寄稿者となるが、Zachary は Bellow と *Partisan Review* の関係について次のように述べている。

Bellow's attitude to the *PR* circle was complicated. As Barrett puts it, "he needed to ob

serve the New York intellectuals, to be stimulated by them, and learn from them what he wanted—that was his job as a writer, and Bellow was a full-time writer. But he moved always at the edge of the circle.” “I wouldn’t belong to anything,” Bellow told Botsford. “I was never institutionally connected with any of these people. I was the cat who walked by himself.” Zachary (265)

Bellow は専属の作家でありながら、*Partisan Review* のサークルに対する態度は複雑であり、常にサークルの周辺にいて、そこに所属したり、所属している人々とかかわることを避けていたのである。ニューヨークにあこがれて作家として名をあげようとやってきたのに、ニュー Yorker と距離を置く様子は一見不可思議にも見える。しかしそこには Bellow とニューヨークの相容れない関係を示す一端が早くも現れていたのである。

Bellow のニューヨーク訪問は、のちの彼の作品にも影響を与え、*Humboldt’s Gift* の主人公である Charlie Citrine は、1938 年にニューヨークを初訪問したという設定になっている。1942 年にシカゴ時代からの親友で、Vasiliki と結婚したばかりの Isaac Rosenfeld が NYU の修士で哲学を学ぶ機会を得て、ニューヨークに移り住んでおり、Bellow のニューヨーク訪問はこの年以降さらに増える。Bellow は妻の Anita が仕事の都合でニューヨークに行けなかったため、単身 Greenwich Village の Rosenfeld 家に滞在した。芸術家が集まり独特の文化を形成していた Greenwich Village の文化も、後述するように Bellow に影響を与えることになった。

ニューヨークでは、ユダヤ系も含めて多くのニューヨーク知識人と会うことになる。Bellow とほぼ同年だが、すでにキャリアを積み重ねていた Alfred Kazin は、*New York Jew* (1978)、以下 NYJ と略す) の中で、Bellow との出会いを次のように記述している。

Through the Chicago writer Isaac Rosenfeld—whose wife, Vasiliki, was my secretary—I met Saul Bellow, who was also just in from Chicago, and who carried around with him a sense of his destiny as a novelist that excited everyone around him. Bellow was the first writer of my generation—we had been born ten days apart—who talked of Lawrence and Joyce, Hemingway and Fitzgerald, not as books in the library but as fellow operators in the same business. NYJ (60)

Bellow は当時、ニューヨーク知識人の間で作家として頭角を現し、ユダヤ人としてはじめてアメリカの文壇に名を連ねつつあり、自ら作家になる運命を意識していた。だが当時の彼は、“Bellow had not yet published a novel; he was known for his stories and evident brilliance only to intellectuals around *Partisan Review* and the University of Chicago.” NYJ(61) とあるように、まだ長編小説も出しておらず短編も数編という駆け出しの作家であり、あふれる才気ゆえに、*Partisan Review* とシカゴ大学周辺の知識人に名を知られていただけであった。このように

Bellow は知名度こそ低かったが、すでに代表的なニューヨーク知識人であった Alfred Kazin は次のように手放しに彼の才能を褒め称えている。

I believed in him as a novelist because, like his strength in being a Jew, this was a sealed treasure undamaged by his many anxieties. Saul was clearly a man chosen by talent, like those Jewish virtuosos—Heifetz, Rubinstein, Milstein, Horowitz.” NYJ (62-3)

Kazin にとって Bellow は、ユダヤ人として背負わざるを得ない様々なハンディを自ら乗り越えて至高のレベルに至ったいわば「密封された宝」であり、様々な分野で名声を博したユダヤ人芸術家同様「才能によって選ばれた選民」であったのだ。彼は心底 Bellow の才能を信じ評価していたのである。ここで更に注目したいのは、Kazin が Bellow とニューヨーク知識人を区別して称賛していることである。

Although he was friendly, unpretentious, and funny, he was ambitious and dedicated in a style I had never seen in an urban Jewish intellectual; he expected the world to come to him. He had pledged himself to a great destiny. He was going to take on more than the rest of us were. NYJ (61)

ひた向きの野心家で偉大な作家になるという運命を早々と感じ取り自覚していた Bellow であるが、その性質は都会のユダヤ人知識人には見られないものとしている。ここでいう都会とはニューヨークを差し、Bellow の出身地であるシカゴは含まれていないようである。この表現によってシカゴ育ちの Bellow とニューヨーク育ちのユダヤ人知識人の差異化を図ったように思われる。冒頭でも Bellow が *Partisan Review* を形成するニューヨーク知識人の中には入れず距離を置いていた旨述べたが、Bellow にとってニューヨークとは、真の意味でじっくりくる居場所ではなかったように思われる。

Bellow は Isaac Rosenfeld に導かれるように 40 年代後半からライヒ主義に傾倒しそのセララピーを受けるなどしている。Zachary も指摘しているように、Bellow の Greenwich Village でのボヘミアンライフを主導したのも Rosenfeld であった。

Bellow's experience of bohemian life in Greenwich Village came mostly through Rosenfeld and Vasiliki and their friends. Rosenfeld's circle included *Partisan Review* writers and NYC and Columbia academics; there was as much talk of Marx, modernism, and Freud in the Rosenfeld's parlor as at the Rahv's or the Phillipses'. But the manner of Rosenfeld's circle were different, hipper, more cynical, not much bothered about getting things written or done, or making it. Zachary (277)

Rosenfeld 家のオープンハウス常連たちには、Alfred Kazin をはじめ、後に *The Victim* の酷評を巡って決別する David Bazelon もいた。乱痴気パーティではジンと麻薬、ガールフレンドのシェアなどが行われていた。Bellow の Village への見方は、“He despised the flip sarcasms of Village types, their abyss mongering and self-absorption, their sloth, their sneering at bourgeois careerists, himself included.” Zachary (282) とあるように、ビレッジタイプの人々の軽薄な当てこすりや、どん底に身を置くさま、自己陶醉、怠惰、出世第一主義に対する冷笑を自嘲も含め軽蔑しており、ここでも心から中に入ることができず距離を置いて、周辺から人々を冷たい目で観察する Bellow の姿勢を伺い知ることができる。

2. Bellow にとってのシカゴとニューヨーク

Kazin は Bellow とニューヨーク知識人を区別していたが、ここで Bellow を巡るシカゴとニューヨークについて考えてみたい。Zachary は、シカゴについて “Chicago was a kind of intellectual center. Harvard, Yale, they were all very prestigious universities, but if you wanted to be an intellectual, Chicago was the place to be.” Zachary (254) というニューヨーカーに向けた Himmelfarb の言葉を紹介したうえで、もし知識人になりたいのなら、確かにシカゴこそ打ってつけの場所であることを認めたとうえで、“Bellow wanted to be an intellectual, but he wanted to be a writer as well.” Zachary (254) と述べて、Bellow は単なる知識人ではなく、作家にもなりたかったと分析している。

Bellow は地元の高校を卒業後シカゴ大学に入学するが、学風等が合わずノースウエスタン大学へ転校する。Atlas によれば、当時のノースウエスタン大学はシカゴよりもむしろエリート主義がはびこっており、「1930年代に大学で文学を教えることは紳士の仕事」Atlas (49) であり、Diana Trilling の “University English departments were still under the vigilant protection of something called Anglo-Saxon tradition.” Atlas (49) という言葉を引用しつつ、WASP によって英文科が支配されていた様子を述べている。当時英文科にはユダヤ人の教員は存在せず、優秀なユダヤ人学生はやむなく文化人類学を専攻したのであり、Bellow もご多分に漏れず文化人類学を専攻した。ノースウエスタンでは才能を認められはしたものの、卒業間際将来を相談した英文科の科長である William Frank Bryan からは、否定的なコメントしかもらえなかった。

“You’ve got a very good record,” Bryan told him, “ but I wouldn’t recommend that you study English. You weren’t born to it.” No Jew could really grasp the tradition of English literature, the chairman explained. No Jew would ever have the right *feeling* for it. Atlas (54)

そもそもユダヤ人は英文学を学ぶようには生まれついておらず、英文学の伝統は理解できな

いという理由で、英文学の道をあきらめるよう諭されたのである。

Atlas は当時の Bellow を特徴づける 4 つの要因として、「ユダヤ移民、カナダ人、中西部の遺産、アングルサクソンのアメリカ文学」、をあげている。ロシアからのユダヤ移民の息子として、カナダの貧民街で苦勞した記憶を抱え、当初カナダ国籍であったことは、*Dangling Man* の主人公 Joseph が、徴兵に際してアメリカ国籍を持っていなかったために、会社を辞めて備えたのに従軍できず、文字通り宙ぶらりんの状態に陥り苦しんだ様に反映されている。

Bellow は、シカゴで知識人としての素養を身につけて作家となるべくニューヨークに出ていった Bellow であったが、彼のバックボーンを支えていたのは、Kazin も指摘しているようにやはりシカゴであったようである。

Chicago seemed to explain his self-confidence. New York was so big and “important” that no novelist had ever done the whole city as Dreiser had done Chicago. What made the New York intellectual’s life a perpetual culture show was no help to the novelist. The speculative directness of Bellow and his friend Isaac Rosenfeld, who addressed experience with every possible question, seemed to me a product of Chicago itself—the city created, a Chicago novelist said at the end of the nineteenth century, expressly for the purpose of making money. NYJ(71)

By now, Chicago had done its best for Saul and Isaac; they were in New York, but they were not like other New Yorkers. NYJ(71)

Atlas が「中西部の遺産」と呼んだように、Bellow にとってシカゴが自信のもとになっていた。Kazin の分析にあるように、ドライサーはシカゴをうまく描いたが、大都会であるニューヨークは、あまりに大き過ぎて、作家にとっては難物であったのだ。ニューヨークは知識人たちにとっては、知的刺激に満ち溢れていて知性を研ぎ澄ませる場であったが、小説家には利用のしようがないのだ。疑問をぶつけて経験を検討する Bellow や Rosenfeld の率直な姿勢はシカゴそのものの産物であり、シカゴの恩恵をいちばん受けている作家として、Bellow と Rosenfeld の名をあげたうえで、二人がほかのニューヨークっ子とは違っていたと指摘している。

ちなみにニューヨークに出てきた当初、作家として順調に成長していた Rosenfeld は、やがて作品が書けなくなり、妻子にも見捨てられ、若くしてほとんど自滅するようにこの世を去っていく。ニューヨークではなくシカゴに留まっていれば、別の人生が開けたようにも思える。

Bellow もミネソタ大学に職を得た(1946-48)のを契機にニューヨークを去る。その後ニューヨークやパリをはじめ様々な場所に住むが、62年にシカゴ大学に職を得たのを契機にシカゴに戻っていく。「ほかのニューヨークっ子とは違っていた」二人にとってニューヨークは安息

の地ではなかったのである。

3. 作家としての苦労の場としての New York

憧れの地であったニューヨークでの Bellow の苦労は尽きない。作家活動を始めたとはいえまだ、限られた知名度しかなかった Bellow は、仕事探しや奨学金を求めて奔走する。Bellow は、*Times* に就職を試みる。しかしこれを阻んだのは、文学界におけるアングルサクソンの伝統であった。それは、採用試験の面接官であった Whittaker Chambers とのやり取りに端的に示されている。

At their interview—as Bellow often told the story, frequently altering the details—Chambers faced away from him, enthroned on a wing chair. Was Mr. Bellow familiar with Wordsworth? he asked. (Sometimes it was Blake.) Bellow protested that Wordsworth had nothing to do with writing journalism for *Time*, but Chambers adamantly pursued his English-lit line of questioning. Atlas (90)

ユダヤ人に Wordsworth や Blake が理解できるはずはなく、そのような素養のない人物には *Times* の文章を書く資格もないというのである。*Times* における Whittaker Chambers による就職面談の失敗談は *The Victim* などの小説の題材として使われており、*The Victim* の中では、主人公である Leventhal が受けた憤懣やるかたない面接の場面として活かされている。Bellow は *New Yorker* にも応募するがやはり同様の理由で不採用となっている。結局 1943 年夏に、彼は、文学とは直接かかわらない *Encyclopaedia Britannica* の編集部に仕事を心得、*A Syntopicon: An Index to The Great Ideas* (1952) に携わることになる。

奨学金については、1943 年に、Kazin や James Henle (Vanguard), James Farrell らの推薦を得て Guggenheim Fellowship に申し込むが却下される。翌年の 1944 年に *Dangling Man* を刊行するが、評判も思い通りにはいかず初版部数もわずか 506 冊であった。1945 年に Edmund Wilson, や Eliseo Vivas など推薦人を増やして再度アプライするが再び却下される。結局受賞は 1948 年を待つことになる。ニューヨークでの金銭面での苦労は続いたのである。

戦争も影を落としている。第二次世界大戦末期の 1945 年に Merchant Marine に入隊している。Zachary によれば、Merchant Marine を選んだ理由として、①訓練が終われば書く時間が十分にあること（海軍や陸軍より厳しくない）。②主としてニューヨークに留まれること。③トロツキ信奉者には Merchant Marine に入る伝統があること。④ヨーロッパ戦線は終わりに近づいていたこと。と 4 つあげている。また、この時の経験は *The Adventure of Augie March* において、Augie March の Merchant Marine への入隊として活かされている。

入隊したものの Bellow は、1945 年 5 月 8 日の VE Day をブルックリンの新兵訓練所で迎え、

6月に Baltimore の Chesapeake Bay で訓練をうけるも、8月には広島と長崎に原爆が投下されて、終戦を迎え、9月15日に除隊になり、9月の終わりに妻の Anita と息子の Greg のもとへ帰っている。結局6か月も従軍せず実戦は体験しなかったことになる。訓練が終われば書く時間が十分にあるという理由で Merchant Marine を選んだとはいえ、彼にとっては、執筆以外の活動を強いられる不本意な半年であったことだろう。

家族と共にニューヨークに戻った Bellow は住む家を探す。Bellow の住んでいたアパートについて、Kazin は、“When you visited Saul Bellow in his tiny room on Riverside Drive, you had to stand on the toilet to get a glimpse of Hudson.” WVE (107-8) と、ハドソン川を見るためにトイレの上に立たないといけなかったくらい小さなみすぼらしい部屋であったと書いている。

もっとも当時ニューヨークで生活していたユダヤ人作家の居住環境は似たような状況で、Kazin は Delmore Schwartz の家についても、“Delmore Schwartz lived in a squalid box on Greenwich Street, an address that should not be confused with Greenwich Avenue.” WVE (108) と場末のマッチ箱のように小さくむさくるしい部屋と居住環境の悪さを述べている。

Bellow は、1945年にニューヨークで *The Victim* を書き始める。1946年秋にはミネソタ大学の准教授になり、ニューヨークを離れるわけであるが、ニューヨークでの生活は Bellow にとって仕事や収入、居住環境をはじめ様々な意味でしっくりいかないものであり、それが *The Victim* という作品に影を投げかけたと考えられる。

4. 反ユダヤ主義と英文学

Bellow が仕事を探す際にも、ユダヤ人には英文学が理解できないと面と向かって言われ職を得られなかったエピソードについてすでに述べたが、当時のニューヨークを中心とするアメリカ文壇の様子も反ユダヤ主義的な要素に満ちたものであった。

当初ユダヤ系作家の文学といえは、ユダヤ系移民一世による *The Rise of David Levinsky* をはじめとする Abraham Cahan による成功話や、*Bread Givers* の Anzia Yezierska や *The Promised Land* の Mary Antin のようにユダヤ系移民でありかつ女性であると二重のハンディを抱えて苦悩する物語に始まり、*Jews Without Money* の Michael Gold らによるプロレタリア文学や、*Cool Million* のようなプロレタリア文学から *The Day of the Locust* のようなシュールリアリズムまで書いた Nathanael West、同じくシュールリアリズムの要素を入れた *Call It Sleep* の Henry Roth までさまざまなユダヤ系作家が活躍したが、いずれもアメリカ文壇の主流にのし上がることはなかった。

第二次世界大戦後、アメリカ文学史上では、いわゆる黒人文学や南部文学と共にユダヤ系作家が活躍するようになったが、Kazin は、この理由として、“The sudden emergence of Jews as literary figures was certainly due to their improved status in an economy liberated by the war and

catapulted by war into domination of the “free world.” NYJ(66)と書いており、ユダヤ人の経済的地位が向上したためそれに伴って様々な面でユダヤ人の地位も向上し、文壇もその例外ではなかったとしている。実際、ニューヨークは多様な人種の都市となっていたが、中でも Jew York と揶揄されるほどユダヤ人が目立つ存在になっていたのである。

ユダヤ人には英文学は理解できないと言われながら、たとえば Lionel Trilling がコロンビア大学でユダヤ人教授（1939-1975）になったように、英文学の世界でもユダヤ人にも道が開かれ始めてはいた。しかし、Kazin の NYJ の中には、反ユダヤ主義的な作家が複数紹介されている。

まず Ezra Pound について、“I felt amazement more than anything else as I read these pronouncements by one of the original poets and master critics of the twentieth century, *the writer most responsible for making modernism in literature part of our lives.*” NYJ (47) と語り、20 世紀最高の詩人で批評家であり、モダニズムの旗手である彼が、反ユダヤ主義的発言を公言していることに驚きを感じたと述べている。続いてイタリアのファシスト系のラジオで Ezra Pound が語った反ユダヤ主義的な発言について時系列的に列挙している。ここでは主要なものだけ引用する。

Roosevelt is more in the hands of the Jews than Wilson was in 1919. (December.7, 1941)
NYJ(47)

Politically and economically the US has had economic and political syphilis for the past 80 years, ever since 1862. (February 3, 1942) NYJ(47)

Don't start a pogrom—an old-style killing of small Jews. That system is no good whatever. Of course, if some man had a stroke of genius, and could start a pogrom up at the top, there might be something to say for it. But on the whole, legal measures are preferable. The 60 kikes who started this war might be sent to St. Helena as a measure of world prophylaxis, and some hyper-kikes or non-Jewish kikes along with them. (April 30, 1942) NYJ(48)

以上のようにルーズベルト大統領をはじめ、アメリカの政治経済がユダヤ人の手中に収められたと批判し、ユダヤ人を蔑称である“kike”呼ばわりした挙句、ユダヤ人虐殺であるポグロムについて反対しているかと思いきや、小物のユダヤ人を殺害しても無意味で、トップのユダヤ人を殺害することや、戦争を始めたユダヤ人をセントヘレナ島へ島流しにするよう提言するなど反ユダヤ主義者らしい発言をしている。ムッソリーニに支配されていたイタリアのラジオ放送での発言とはいえ、アメリカの知識人の言葉とは思えない反ユダヤ主義的暴言である。

Kazin はまた Allen Tate の反ユダヤ人感情についても言及している。彼の場合、古い南

部の奴隷制度や固定的宗教感が背景にあり, “Tate, with his unconvincing absolutes about the old South’s slavery and religion, furiously began every conversation as if I personified the liberal New York Jewish enemy.”NYJ(59)とあるように, Kazin に対して「リベラルなニューヨークのユダヤ人という敵を具現化した人物」とみなして攻撃していると分析している。それは下記にも示されている。

Like all the Southern writers I ever met in New York, he had a homesickness for the South he no longer lived in that made him see everything in New York with derisory eyes—especially Jews. The Southerners I met were generally disturbed by Jews—obsessed, condescending, always just veering off with a smile from some irreversible insult. They were not used to taking Jews seriously. NYJ (59)

ここでは Tate のみならず南部作家をすべてユダヤ人に対して好意的でないと分類したうえで, 彼らが「ニューヨークのあらゆるものとりわけユダヤ人に対して嘲笑的にみえており, そもそもユダヤ人をまともに扱ったことがない」としている。戦後, ユダヤ系作家と共に南部作家も文壇をにぎわせたが, 両者は必ずしも良好な関係を築けてはいなかったようである。

更に Kazin は Katherine Anne Porter についても人種差別主義者の要素をあぶりだしている。彼女は James Baldwin 対しても差別的な当てこすりを書簡の中で書き, Saul Bellow に対して “Jews didn’t have the background to use English properly.”WWE (35) と, ユダヤ人には英語を適切に使用する能力さえかけていると愚弄している。

以上のように戦後になってもアメリカの文壇では, 反ユダヤ主義的発言やユダヤ人差別が続いていたのである。

5. *The Victim* の書評を巡って

Bellow は 1946 年秋にミネソタ大に職を得てニューヨークを離れる。しかしそこもまた, WASP の牙城であったため, 彼は, “Bellow was intimidated by these ‘well-bread WASPS,’ with their charming, acidic condescension, their moneyed airs, and their ‘Emersonian, gaunt New England’ looks.”Atlas (114-5) とあるように, WASP に引け目を感じている。居心地の悪さの中で, 当時同僚であった Robert Penn Warren は父のように温かく Bellow に接してくれた。

1947 年 1 月に Bellow は, *The Victim* の初稿を送るが, 出版社の反応は鈍い。しかし Warren は気に入ってくれて, 「よく売れるだろうと予言」Atlas(117) してくれた。

1947 年 11 月に Vanguard から *The Victim* は出版されるが, 書評を見て買い求めようとした友人や知人たちから, 近所の本屋に, Bellow の本が並んでないとの苦情が寄せられ, 実際, シカゴ大学の書店にも並べられていないという状況であった。その有様を, Bellow は Henry

Volkening に宛てた手紙の中でつづっている。

I have had the disappointment in the last two weeks of receiving letters from friends and acquaintances in various parts of the country who had seen reviews of *The Victim* and tried to buy it only to be told by local booksellers that they had never heard of it. Knowing nothing of the mysteries of book distribution, I had always assumed, innocently, that the leading stores in every city automatically received a few copies. It rather shocked me to learn that the University of Chicago bookstore and Woolworth's didn't even know I had published a new book. As a Chicagoan and a Hyde Parker, I feel hurt by this. *Letters* (46-7)

Bellow の新作をほぼ無視するかのような配給の点でも失望した Bellow であったが、さらに彼の心を傷つけたのは、近しい人からの酷評であった。*The Victim* を巡って、Bellow は様々な人と手紙等でやり取りしている。

Zachary によれば、Bellow は David Bazelon に対して、アドバイスや就職先の世話はおろか、ミネアポリスやパリの家への招待まで行っている。その彼が *The Victim* を酷評したことに対して、1948 年 1 月 5 日付けの手紙で、Bellow は次のように反論している。

I agree with you entirely about *The Victim* that it is not so successful as it might have been and does not grow to the fullest size. Compared to what is published nowadays between boards, it is an accomplishment. Judged by my own standards, however, it is promissory. It took hold of my mind and imagination very deeply but I know that somehow I failed to write it *freely*, with all the stops out from beginning to end. *Letters* (50)

I assemble the dynamite but I am not to touch off the fuse. Why? Because I am working toward something and have not yet arrived. I once mentioned to you, I think, that one of the things that made life difficult for me was that I wanted to write before I had a sufficient maturity to write as "high" as I wished and so I had a very arduous and painful apprenticeship and still am undergoing it. *Letters* (50)

Bellow は自身の未熟さも容認したうえで、それでも作品には自信を持っており、それを友人によって打ち砕かれたことに対して苦言を呈しているのである。

酷評はまだ続き、1948 年 4 月 21 日付けの Melvin Tumin 宛の手紙では、“I got a rather disagreeable letter from Kurt (Wolff) about *The Victim*. I didn't mind his criticisms of specific things but I disliked extremely his telling me 'you aren't there yet' and all his didactics, his tacking me down with neat clips.” *Letters* (57) というように、まだ Bellow が一定の水準に達していないという

Kurt の批評に対して不満を述べて、彼のことを背後から真っ先にシーザーを刺した暗殺者の一人である “envious Casca” と呼んで避難している。David Bazelon に続き Kurt Wolff も自分を評価していると信じて疑わなかった人だけに背後から手痛い一撃を食らったと感じたのであろう。

これに対して、Robert Penn Warren のほかにも *The Victim* を好意的にとらえてくれた人々がいた。その一人である Alfred Kazin に宛てた 1948 年 5 月 2 日の中で Bellow は、“Needless to say, your liking *The Victim* made me very happy—grateful, to qualify, further.” *Letters* (61) と、Kazin が作品を気に入ってくれたことを手放しで喜んでいる。また、Kazin も “It bothers me that *The Victim* is not better known. Bellow himself has belittled it as only a second novel, Part of his apprenticeship.” *WWE* (137-8) と、*The Victim* が正当に評価されていないことを残念がっている。

以上、作家になるべくシカゴからニューヨークに出てきた Bellow だが、ニューヨークでの生活は必ずしも彼にとってしっくりくるものではなかった。しかし、WASP に支配され反ユダヤ主義もはびこるアメリカ文学の世界で奮励努力し、ニューヨークを舞台とする *The Victim* を書き上げたが、正当な評価を受けることができなかつた旨述べてきた。Bellow が初めて全米図書賞を受賞したのは、1954 年の *The Adventure of Augie March* を待つことになるのだが、最初の 2 作がなかなか評価されなかつたのは、Bellow がユダヤ人であり、WASP ではなかつたためと考えられないだろうか。当時アメリカ文学がユダヤ人作家を迎え入れる準備ができていなかったのである。

また別の要因、つまり Bellow が心底シカゴっ子であったことも一因であろう。Steve Neal は、“The Quintessential Chicago Write” の中で、そのあたりを示す Bellow 自身の言葉を紹介している。

In writing *The Victim* I accepted a Flaubertian standard. Not a bad standard, to be sure, but one which, in the end, I found repressive—repressive because of the circumstances of my life and because of my upbringing in Chicago as the son of immigrants. . . . A writer should be able to express himself easily, naturally, copiously in a form which frees his mind, his energies.”
Conversation (175)

Bellow は *The Victim* を書くに際してフローベル流の書き方を採用したが、彼にとってはシカゴで移民の子として育ったことが人生の一つのコアをなしており、フローベル流の正確無比さや主観の排除は受け入れがたく、また、作家として心を解き放ち自由に書くことを求めることが重要であると悟った。*The Victim* を執筆したニューヨークは作家として活動する上で、最適の地ではなかつたといえよう。次作は *The Adventure of Augie March* であったが、その冒頭は、“I am a American, Chicago born—Chicago, that somber city—and go at things as I have taught myself,

free-style, and will make the record in my own way: . . .” と、アメリカ人の中でもシカゴ人であるとし、しかも自由に生きることを宣言しているのである。ニューヨークの呪縛から解放された作家として自由に生きることに決めた Bellow 自身の宣言ともいえよう。

参考文献

- Atlas, James. *Bellow: A Biography*. Random House: New York, 2000.
- Bellow, Greg. *Saul Bellow's Heart: A Son's Memoir*. Bloomsbury: New York, 2013.
- Bellow, Saul. *The Victim: A Novel*. Weidenfeld and Nicolson: London, 1947.
- . *The Adventure of Augie March*. Penguin Books: New York, 1949.
- Cronin, Gloria L. and Ben Siegel Ed. *Conversation with Saul Bellow*. University Press of Mississippi : Jackson, 1994.
- Kazin, Alfred. *New York Jew*. Vintage Books: New York, 1978.
- . 1995. *Writing Was Everything*. Harvard University Press: Cambridge, 1999.
- Leader, Zachary. *The Life of Saul Bellow: To Fame and Fortune 1915-1964*. Vintage: London, 2015.
- Taylor, Benjamin ED. *Saul Bellow Letters*. Viking: New York, 2010.